

## バートランド・ラッセルの教育思想(5)

高田, 熱美  
九州大学医療技術短期大学部一般教育

<https://doi.org/10.15017/172>

---

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 14, pp.69-79, 1987-02-28. 九州大学医療技術短期大学部  
バージョン：  
権利関係：

## バートランド・ラッセルの教育思想(5)

高田 熱美\*

### The Educational Thought of Bertrand Russell (5)

Atsumi Takada

#### 序

Bertrand Russell は生涯にわたって人間の問題に関心を抱いた。とりわけ Russell は人間の尊厳性を説き、その生存と幸福を追求した。「人間の精神が奴隷化する方向へ押し進められていることに対して、立ち向かうべき何が在るであろうか。私は、キリスト教及び仏教の本質であるところの、あの古代宗教の、個人に対する尊重以外には何ものをも見出すことができない。」<sup>1)</sup> Russell によると、個人が社会の究極単位であり、最高の価値であった。「人びとは、政治、経済及び社会組織一般が目的ではなく手段の領域に属していることを、ときとして忘れる。……究極的な価値は全体ではなく個人の中に求められねばならない。善い社会は、それを構成する各人の善い生活のための手段であり、それ自体において独立した価値をもつのではない。」<sup>2)</sup>

それでは、Russell が思い入れる人間とは何であるのか。ここでは、Russell が語る人間について探究することにしたい。

#### I 中性一元論

実は、Russell は、「人間とは何か」という問いを立て、それ自体を論究したことはない。したがって、Russell の著作からこの問いに関わる発言を取り出し、それを検討することによって人間の問題へと接近するほかはない。すると、われわれは先ず精神と物質の問題に出会う。従来、多くの思索家たちは、精神と物質について

考えるときに人間についての何らかの重要な発言を提起したのである。

Russell は、精神と物質について、「中性一元論 (Neutral Monism)<sup>3)</sup>」なる理論を提供した。これによると、「世界は変化する状態をもつもの (things) からではなく、出来事 (events) から成っている<sup>4)</sup>」のであった。「感覚が本質的に関係的でない出来事であるとすれば、心的出来事と物理的出来事とを基本的に違ったものとして見る必要はない。精神も一片の物質も決定的には違っておらず、ときには、現実と同じ素材からつくられた論理的構成 (logical construction) と見ることが可能になる。<sup>5)</sup>」つまり「一片の物質は因果法則すなわち物理学の法則によって結びつけられた出来事の群である。精神は因果法則すなわち心理学の因果法則によって結びつけられた出来事の群である。<sup>6)</sup>」

Russell は、世界を変化する出来事と見るとき Descartes 以来続いてきた精神と物質の二元論を念頭においていた。Russell は、世界を精神と物質という二分法によって説明することを拒み、それを崩そうというのであろう。「私がこの論文で手がけたいことは、精神と脳髄との関係をいずれの存在をも含まない言葉で述べなおすことである。<sup>7)</sup>」

精神と物質という二分法を認めなければ、精神と物質との相互作用あるいは相互に独立した両者の平行関係なるものを論ずる必要はなくなる。Russell によれば、「生理学者が脳の中にある物質と見ているものがまさしく思想や感情から成っている<sup>8)</sup>」のであった。しかも、「脳の

\*九州大学医療技術短期大学部一般教育

の中にある物質を見ている」ということは生理学者の心の中の出来事である。

一般に、われわれの常識は、脳の中にある物質を見ているとき、それを精神と同一視しはしない。精神は脳にある物質ではなく、それと関係はあるが異質の、別種のエネルギーを有した何ものであると見る。もっと具体的にいえば、われわれは、その人の顔、とくに眼の中に思想や感情を読みとる。とはいえ、眼は思想や感情と同一であるとは見ない。こうした常識をRussellは拒否するのである。「生きている脳をつくっている出来事は、それに対応している精神をつくっている出来事とまさしく同じであるということにも私は同意する。<sup>9)</sup>」

「世界は出来事である」、これがRussellの根本命題であった。精神と物質とが世界を構成しているのではなく、出来事が世界を構成している。したがって、精神も物質も出来事である。しかし、両者は異質の出来事というのではなく、出来事の見方の違いによって生れたのである。「精神と脳髄との相違は、それを構成している素材にあるのではなく、まとめ方にある。<sup>10)</sup>」  
「重要な点は、精神と物質の相違は質の相違ではなく配列の相違だということである。<sup>11)</sup>」

Russellは、このことを住所録にたとえて語る。それは人びとの住所が一方では地域別に、他方はアルファベット順に配列されているようなものである。それゆえ、精神と物質とはそれぞれに独立した存在であるとか相互に関係し合っているとかいうのではない。それはまさに不可分かつ同一の出来事を表明していることになる。

Russellにとって、世界はこのものとして同定できるような実体ではない。このような、世界ないし存在把握は、もちろんRussell固有のものではない。それは、Russellの直接の師Whiteheadにも見られる。Whiteheadは世界を、主語—述語、実体—属性、主観—客観といった命題で分析し、把握することに問題を抱いていた。その結果、Russellと等しく、WhiteheadはDescartesを批判することになるのであるが、彼によれば、世界は、出来事から成っており、

この出来事が有機的に関係し合っているものであった。<sup>12)</sup>

ところが、RussellとWhiteheadは互いに相手の思想を理解することが少なかった。Whiteheadは、Russellを「Platon的対話そのもの」と評して、その難解さを表明した<sup>13)</sup>というし、Russell自身は、「Whiteheadの哲学はとてもあいまいで、それには私が理解できないところがたくさんあった<sup>14)</sup>」と語った。その理由は、Russellに比べて、Whiteheadの出来事(event)がはるかに形而上学的背景を有していたことであろう。Whiteheadにおいては、出来事は、この空時(space-time)においてPlaton的な永遠的対象がエネルギーをもって進入すること(ingress)であった。これに対して、Russellは、師のように出来事の根源を問いつめることはしなかった。ただし、それは理性の限界であるを見たからであろう。したがって、出来事があるとだけ語る。

この見方は、人間の認識における感覚と感覚所与、対象へ関わる意識作用あるいは認識と対象の区別をなくすることになる。それゆえ、この見方はHumeに接近する。Humeはただ「知覚がある」とだけ語ったが、Russellにおいてはそれは「出来事がある」ということなのだ。Russellにとって、直接に経験された感覚的对象すなわちわれわれが椅子やテーブルや太陽や月などを見るときに見るものは、われわれの心の中の諸部分、つまり出来事であって、外在する物的対象そのものではないのだ。それゆえ、ここでは、見るものと見られるものとの区別がなくなって、「こと」としての見ること、見られることが成立するのである。このため見ることは同時に見られることであり、したがって、それは相互的であって、「見えていること」というひとつの出来事へ収斂するのである。

## II Descartesの自己

中性一元論は感覚と感覚所与、主体と客体という二元論の見方を消滅させた。それは必然的にDescartesの自己をも霧消する。

Russellは語る。「批判的懐疑という方法は、

……非常な哲学的重要性をもっている。もし、懷疑主義がどこかで止まることになるのであれば、その方法が積極的な結果のみを生じうる、ということは論理的に明白である。論理的知識と経験的知識の両方があるとすれば、二種類の停止点がなければならない。すなわち疑いえない事実と疑いえない推論原理とである。Descartesの疑いえない事実は彼自身の思考である。……『私は考える』が彼の究極的前提なのである。ここで『私』という言葉はまさに不当である。彼は自己の究極的前提を『考えがある』という形式で述べるべきであった。『私』という言葉は文法的には便利であるが所与(a datum)を記述してはいない。Descartesが『私は考えるところのものである(I am a thing which thinks)』という時、彼はスコラ主義から受けついでカテゴリーの装具をすでに無批判に用いているのである。彼は、思考は思考者を必要とするということをごくどこにも証明してはいないし、また文法的な意味における場合を除いて、それを信じるべき理由もないのである。<sup>15)</sup>

Descartesの自己は、自立し、疎外されていく近代の人間の特異な孤独を象徴したものであろう。Russellによると、Descartesの「私」は疑いえない確固たる実体などではない。「私」は、とどまることを知らぬ懷疑を停止させ、思考の生産を高めるための停点なのである。それだけのことなのだ。論理的に言えば、「思考」から「思考する者」、「私は考える」から「私は在る」を導き出すことは誤りであろう。前者は論理の飛躍であり、後者はトートロジーというべきであろう。

Russellによると、Descartesは、主語 — 述語というひとつの形式的かつ固定的な文法によって、世界を記述しようとしていたのだ。主語 — 述語命題は世界を記述する唯一絶対の文法ではあるまい。「主観は、しかしながら、数学的点や瞬間と同じように、論理的フィクションであると思われる。主観的なものが導入されるのは、観察がそれを明らかに示すからではなくて、そうすることが言語上便利であり、それ

は明らかに文法が要求するからである。<sup>16)</sup> 主観は、文法が要求する名目的実体(nominal entity)ないしひとつの非存在の名(the name of a nonentity)であって、「それが在ると想定するだけの十分な根拠はない<sup>17)</sup>」のである。それゆえ、「われわれは、主観を世界の現実的構成要素と見ることをやめねばならない。<sup>18)</sup>」

しかし、それにしても、何故に文法は主観ないし主語を要求するのか。主語 — 述語という関係的文法はいかにして生れたのであるか。Russellはこう語る。「……『私』という語は、文法と一致するように挿入されており、文法は、われらが祖先のインド・ヨーロッパ人が野営の火のまわりでつぶやいた形而上学を表わしている。<sup>19)</sup>」

Russellは、主語 — 述語の文法形式は特定の文化ないし心理の問題である、といたいのであろう。おそらく、Russellは、奥深い森林の夜の闇が圍繞している焚火を前に、じっと膝を抱えてうずくまる、孤りの古代人が、沈黙の只中において孤独を体験したとき、「私」なる言葉が生れてきたというのであろう。換言すれば、私 — 自己についての意識は、他者すなわち存在するものの消滅のとき、たとえば、親しい仲間たちからはぐれたとき、あるいは、愛する者を失ったときなどに、生き生きと生じるにちがない。けれども、Russellは、それを形而上学というのだ。なぜなら、要するに、「主語は、われわれがわれわれの思考から締め出さねばならぬ実体への信念を表現している<sup>20)</sup>」からである。

Russellにとって、「私」は実体への信念であって、実体ではない。本来、「私」なるものは名前をつけられることにおいて浮かび出るものであろう。幼児を考えてみると、幼児は自己に名前があること、自己の名前を知るとき初めて自己を意識するようになるという。こどもにとって、自己とは「太郎」であり「花子」であるのだ。Russellはこのような意味で語っているのか。続けて彼はこう述べる。「それゆえDescartesが『私はある』という時、彼が意味するべきこ

とは『私は名前である』である。<sup>21)</sup>」

「それゆえ、『私』という語を切り捨てなければならない。<sup>22)</sup>」

しかしながら、Russell が Descartes の哲学で最も強調したかった誤りは次のことである。「私が強調したいことは、『私は考えるもの(a thing)である』ということに含まれている誤りである。ここには実体の哲学が仮定されている。世界は、変化している状態を有する多少とも永続的な物体から成っていると仮定されている。この見解は原初の形而上学者たちによって展開されたのである。彼らは言葉を発明した。そして、彼らは、自分たちが最初は恐れ、その後食べてしまった者が同一人物であると確信しているのに、戦闘中の敵と殺されたあとの敵とが違ふことに驚愕したのである。常識がその教義を導き出すのはこのような起源からである。<sup>23)</sup>」

人間は生と死とにおいて極端な相違を呈する。これはたしかに大きな驚きであろう。これは、食べられる前の人間と食べられたあとの人間とは別のものであったとの想念をさそい出しかねない。この想念に耐えうるためには、いかにあろうと、自分たちが食べる前の人物と食べてしまって今は存在しない人物とが同一であるとの確かな証拠が必要であろう。これが「考えるもの」というひとつの実体の観念を生み出した。彼らは、敵の肉と共に「考えるもの」という霊的実体を食べたと思うことによって満足しかつ安心したのである。したがって、Descartes の信念はこのような野蛮な迷信を原理としている、と Russell は言いたいのである。

さらに Russell は続ける。「二人の Descartes がいる」と。すなわち、「彼自身に対する Descartes と彼の友人に対する Descartes である。<sup>24)</sup>」これは内に対する Descartes, 外に対する Descartes と称してもよい。ここで問題とされるのは内に対する Descartes である。Russell は説く。「彼は彼自身に対してあること(What he was to himself)に関心をもつ。彼自身に対してあることは、変化する状態をもつ単純実体(the single entity)としてはうまく記述されてはいない。<sup>25)</sup>

彼は彼自身にとって何であるのか、あるいは私は私自身にとって何であるのか。それは「考えるもの」であるのか。そういうものは単純実体ではありえない。単純実体は全く無駄な用語であり、変化する状態ということで十分なのである。したがって、「彼自身に対する Descartes は、それぞれが考えと呼ばれうるような出来事の系列としてあらわれたであろう<sup>26)</sup>」と Russell は語る。

Hume がそうであったように、Russell は、私が私自身に対してあるとき、私はただ変化している状態があることに気付くのである。それゆえ、そこには考えるものとしての「私」などはない。あるといえば、考えが起こり、消え、そして起こる。ただそれだけがある。『Descartes は考える』というかわりに、われわれは『各部が考えであるようなものの系列である』というべきである。そして、『ゆえに Descartes は在る』というかわりに、『Descartes はこの系列の名前である。ゆえに Descartes はある名前であるということになる』というべきである。<sup>27)</sup>かくて、「Descartes の‘精神’は考えの系列である。<sup>28)</sup>」それは、「心的現象(mental phenomena)<sup>29)</sup>」と呼ぶ方が正確であるようなものである。

ある心的現象が生滅する。その現象に私とか Descartes とかいった名称が与えられている、と Russell はいうのだ。これは、やはり、乳幼児の心的現象を垣間見るときの状態ではあるまいか。おそらく、乳幼児の心的現象は、世界の出来事そのまま心的世界において明滅し、流れ動いていることを示すであろう。彼らには自他の区別はまだない。自他未分化、世界との癒合状態がこどもの心的現象なのだ。大人たちはそういう心的現象にある名前をつける。それは「太郎」であり、「花子」でもあり、やがてそれは「ぼく」「わたし」という代名詞でも表わされる。したがって、「名前」あるいは「私」なるものは、心的現象につけられた名称であるということも諾うことができる。

しかしながら、名前がつけられることによって、まさに心的現象はこの時間と空間の中で秩

序づけられ、同一性を獲得し、統合し、創造する自己となるのではないか。自己自身に対する自己は、ある種の実体ではないとしても、現実には「私は私である」との確信を抱きつづける。いったい、自己のない人間があろうか。人間とは自己であることではないか。Russell の批判によっても、「私は私である」との確信は依然として残る。こうした確信はいずれより生れ出るものであろうか。Russell 自身でさえ、Descartes の自己を批判するとき、「私」なる主観を用いて論述するのだ。

Russell は語った。「私が擁護してきた理論のために言うべき最も重要なことは、この理論が神秘を払拭するということである。<sup>30)</sup>」しかし、やはり「自己」なるものの神秘性は消えない。むしろ、前にもましてその神秘性が輝き出てきたように思われる。Russell によると、「私が提出した理論でもって、あらゆる問題が消失する<sup>31)</sup>」のであったが、しかし解決されたわけではないのだ。やがて、Russell 自らも、中性一元論が、物質と精神、客体と主体、対象と認識、などの問題を解決できたのではないと考え始める。

### III 二元論への回帰

中性一元論においては、ひとつの感覚は精神における出来事であるとともに物理的世界の出来事であった。ここでは精神と物質という伝統的な関係の問題が消失した。しかし、中性一元論は、抽象的な限定された領域においてのみ成立しうるといえよう。他方では、物質的世界とは異質の心的実体、いわば主観が想定されなければ解くことのできない問題が残るのである。

Russell はまず知識の領域において中性一元論が踏みこみえない問題があるという。「たんなる身体的行動に見られるような知識を除けば、他のいかなる知識の形式においても本質的である二元論がある。<sup>32)</sup>」たしかに、たんなる身体的行動に関する場合には、二元論は問題にならない。たとえば、われわれは、歩くとき、右脚、左脚を交互に意識しながら前へ出しているわけではないのだ。われわれはただ歩く、歩くとい

うことを意識せずに。ところが、そういう状態にあっても、ふと、自己の歩き方を意識する。あるとき、われわれは世界の何ものかについて意識し、認識し、記憶するのである。「知ることとは知られるものとは別である。<sup>33)</sup>」

Russell によれば、感覚のレベルにおいても、嗅覚や味覚、身体感覚（頭や腹の痛みなど）に比べると、視覚や触覚、聴覚は二元性をより強く示すという。本来、触覚は「ふれる」ということにおいて主・客の二元性を越えて、主客が結びつく働きをするのであるが、Russell は、触覚及び視覚、聴覚を能動的な作用をする感覚と見ている。この意味での触覚は「さわる」こと、運動することなどを含んでいるのであろう。つまり、Russell は、見る、さわる、聞く、といった働きはその対象を明白に要求するという点で、二元的だといいたいのだ。

感覚において示される二元性は知覚（perception）のレベルにおいては一層明瞭である。たとえば、感覚において「見る」ということは見る対象を前提とはしているが、たんに「見えている」ということをも含んでいる。ところがまさに知覚において「見る」ということは「特別の努力<sup>34)</sup>」によって、対象に注意を払っていることを含んでいる。

人間が身体感覚と知覚中枢、いわば感覚と意識の統合体であって、そのいずれでもないとしても、知覚のレベルに立つかぎりでは、知覚する主体と知覚される客体とを分立せざるをえないであろう。この点で、中性一元論は、身体感覚が優勢であるような人間にのみ真であるような理論であろう。すなわち、すでに見たように、大脳が未完成である乳幼児などには妥当する理論であろう。乳幼児には主体も客体も未分化であるのだから。あるいは、メディア装置の進歩によって、直接大脳そのものに感覚を受容させることができるのであれば、身体感覚器を欠落させることができるわけであり、そうした大脳的人間には中性一元論は妥当するかもしれない。つまり、この場合、音楽は大脳にセットされることによって、聴覚を通してではなく、

大脳そのものにおいて生じるであろう。

しかしながら、心身の統合体として生きる現実の人間は、たえず感覚と精神とにおいて対象を知覚するのである。知覚は意識的なものであり、意識の注意(attention)によって始めて感覚は知覚となり、われわれは対象を知ることができるのである。それを Russell はこう語る。「われわれが経験する最も直接的な知は、感覚的な現存(sensible presence)に、より以上の何かを加えている。<sup>35)</sup>」「感覚を知覚に変えるのはこれらの付加的なものである。<sup>36)</sup>」

「より以上の何か(something more)」あるいは「付加的なもの」とは何であるか。Russell は、それを正確に定義してはいないし、もし正確に定義しようとするればむしろそのことによって誤りにおちいるであろう、と考える。しかし、そう思いながらも Russell はあえてそれを「注意」と称したのだ。したがって、「そういう出来事はそれらが注意される時『知られる』のだということにしよう。<sup>37)</sup>」

Russell においては、知覚、注意、意識はひとつの系を為している。これらはいずれも経験的なことであろう。それゆえ「『知覚』は過去の経験に基づいた習慣を含んでいる。<sup>38)</sup>」たしかに、知覚は経験と結びついており、その意味では学習の結果であろう。これに対して、感覚は「われわれの全経験のうちの部分、過去の歴史から独立して刺激のみによって生じる部分<sup>39)</sup>」なのである。したがって、「感覚的な核、(the sensational core)<sup>40)</sup>」いわば感覚のレベルにおいては、たとえば犬を見る場合、それは1片の色あるいは形として見えるのであって、それを犬と認めることができるためには、「より以上の何か」としての注意及び習慣、過去の歴史的経験が必須である。注意もまた対象を選択することであり、その選択は習慣や歴史によって可能であるとすれば、注意は対象(犬)に対するひとつの経験的解釈となる。「出来事全体はつねにひとつの解釈、感覚的核が習慣を含む付加的なものを有することによって成り立つ解釈なのである。<sup>41)</sup>」

感覚を知覚に変え、それから犬のイメージを構成し、犬であると知るののはひとつの解釈である。この解釈は習慣、歴史と関わって生れる期待や確信を含んだ注意からつくられる。まず、われわれが犬に出会う。つまり犬を見る。そのときわれわれはこれは犬ではないかと期待し、あるとき、いわばほとんど瞬時に確信する。そのあと犬の全体を分析して、その部分の特性を取り上げる。部分から全体を構成するのではない。

こうして Russell は、対象を知るということは知る側の期待や確信が関わっていると見る。これら期待や確信は知る主体の問題であろう。したがって、Russell は二元論を導入することになる。期待や確信はつきつめれば主体である自己そのものである。だが、Russell は自己を探求することをしない。Russell にとっては、知るということがどういう構造をもつかを明らかにすることが眼目であったからであろう。

このことを踏まえたうえで、さらに自己について考察してみよう。

Russell によると、さらにもうひとつの理由が二元論を必要とする。「二元論のもうひとつの形式は想像と記憶において生じる。<sup>42)</sup>」想像や記憶は、Hume にとっては自己同一性の有力な根拠であったが、それは Russell においても同様な意味をもつのであろう。出来事についての想像や記憶は出来事そのものではないのであって、それゆえ、想像や記憶には「主観と客観との関係と称してよい何か<sup>43)</sup>」があることになる。もっともこの何かについては慎重な解釈が必要であろう。「ここで本質的な問題は心像(image)がその感覚的原型に対してもつ関係である。<sup>44)</sup>」すなわち、私が過去の出来事を思い出すとする。この場合、思い出していることと過去の出来事とは一致するという信念があろう。「解釈(interpretation)は『信念』ということを導入しなければ可能であるとは私は思わない。<sup>45)</sup>」

Russell は、「信念」を導入するかぎり、信ずる主体である私 — 自己を確認せねばならぬであろう。これは、内外のあらゆるものへ懐疑を

投げかけたあげく到達した究極的な自己, Russell が批判したあの Descartes の信念とどう違うのであろうか。Descartes は思考の究極的立点としての自己にたどりついたのであるが, Russell は広義の認識 — 解釈を成立させるための現実的要請として自己を定立することになる。

それでは、意識し、知り、期待し、確信し、想像、記憶するところの自己とは何であるか。そこまでくると、Russell はもう探究することはしない。それは探究の射程外にあるというのか。とすれば、自己であることとしての人間、これは何かという問いはアポリアに至ったというべきか。

#### IV 衝動と精神

Russell においては主観と客観、精神と物質という二元的な世界把握が復帰した。主観とは自己であり、それは物質より精神に組するものであろう。それゆえ、精神について論及するとき Russell が念頭においていた自己、人間の本質が顕になるのではあるまいか。

事実、Russell は精神について多くを語り、とりわけ衝動との対比においてそれを明らかにしている。すなわち、「あらゆる人間の活動は二つの源泉つまり衝動と願望から生起する<sup>(46)</sup>」と Russell は語る。衝動は願望よりもはるかに本性的であろう。「われわれの自然のより本性的な部分において、われわれは、ある目的を求めた願望によってではなく、ある種の活動へ向かう衝動によって支配されている。<sup>(47)</sup>」「直接的衝動こそがわれわれを動かすものであり、われわれが考えている願望は衝動のたんなる外表にすぎない。<sup>(48)</sup>」したがって、願望は「意識的」であり、衝動は「あらゆる願望の主人<sup>(49)</sup>」である。

また Russell はこうも語る。「人間の諸活動はおよそ三つの源泉から生じているといえよう。これらの源泉は、互いにはっきりと分けられるものではないが、異なった名まえを与えうるほどには十分に区別できるものである。私が意味する三つの源泉とは、本能、知力及び精神である。<sup>(50)</sup>」しかし、これらの源泉と称されるもの

はいずれも衝動に還元されるであろう。Russell によると「本能 (instinct) は、自己及び自己の属する集団の生物学的成功に本質的に関わりのあるすべての衝動を含んでいる。<sup>(51)</sup>」知力の本質である好奇心についていえば、「好奇心は、そこから科学的知識の全建築が成長してきた初源的な衝動である。<sup>(52)</sup>」また、精神についてはこういう発言がある。「芸術は本能から出発し精神の領域へ上昇する。<sup>(53)</sup>」これを見ると、本能は下等動物が有しているような自己保存と生殖を基底にして知力や精神の領域へも広がっているであろう。その点で本能は衝動に近いであろう。しかし、本能は衝動と同じではない。衝動は本能、知力、精神 (Spirit) に行きわたるエネルギーではあるまいか。

「宗教は精神から出発し、本能の生活を支配し、告発しようとする。<sup>(54)</sup>」それゆえ、本能のみならず精神もエネルギーであり、したがって衝動なのであろう。衝動とは、あらゆる人間活動のエネルギーにつけられた名称であろう。しかしながら、衝動がエネルギーであるというだけでは、人間の理解にとって何ら新しい意味をもたらさない。Russell がそもそも衝動を語る所以は何であるかが問われるべきであろう。

おそらく、Russell は伝統的な力である理性に対抗するものとして衝動を用いたにちがいない。これには、理性によって築かれた文明への対抗が込められているであろう。一見して、衝動という名称は、理性の形式性や画一性、抽象性を攻撃するスローガンとなりうるのだ。衝動は、野性味をおびた、荒削りの、躍動する生命力を彷彿とさせる。だが、そうであるとしても、スローガンは理論そのものではない。衝動ということにおいていかなる人間理解が可能となるのか。衝動の背後に、Russell のいかなる人間理解がひそんでいるのか。

Russell は説く。「すべての衝動は、それが結果を予見することから生じないという意味で本質的に盲目である。<sup>(55)</sup>」衝動は「いぜんとしてそれ自体が目的をもたないままである。<sup>(56)</sup>」衝動は目的が定まらず、無秩序的であり、よく規

制された体系の中には容易にはめこめられないものである。<sup>57)</sup>」すると、衝動は精神も本能も知力も癒合して定かでない、どろどろとしたカオスのようなものであるのか。

人間の本能や精神を衝動という名称によって一元化することは、精神と物質を出来事という名称によって一元化したあの中性一元論を想起させる。人間性を衝動という無目的なエネルギーによって一元化することは、人間性の解明を困難にするどころかあいまいにさえする。人間はわれわれの視界から遠くなった。これでは、われわれの思索は前へも後へも歩むことができない。

ここで、Russellは何を語ろうとしているのか。衝動の無目的性において人間の根源的自由ないし創造力を語ろうとでもいうのか。

## V 人間になること

衝動は目的が定まらず、無秩序的で、規制された体系の中にはめこまれぬ、ということは、視点を変えれば、人間の自由と可能性を象徴するのではあるまいか。「先見のない衝動は戦争の源泉であるがしかしそれは科学と芸術と愛の源泉でもある。<sup>58)</sup>」衝動は可変的であるのだ。すなわち、「人間の衝動は初めから生れつきの気質によって固定されているわけではない。ある種の広い限界内において、衝動はその生活環境や様式によって深く変えられうるのである。<sup>59)</sup>」

もし衝動を変えることができるとすれば、衝動を悪ではなく善へ変えるであろう。Russellは戦争の源泉となる衝動を所有衝動、科学、芸術、愛、すなわち知識や美や善の源泉となる衝動を創造的衝動という。但し、こうした衝動は固定してあるのではなく、たえず変動するエネルギーであって、それゆえ、衝動は所有と創造の二つに大別できると断ずるのは誤りであろう。これは衝動の現実的結果に付けられた名称というべきであろう。

Russellの発言の中で重要な点は、いかなる原因が衝動をして創造的なものへと顕現せしめるか、ということである。衝動はたんなるエネル

ギーであって、拡大するエネルギーの出口が偶然創造への出口であるかないかによって、所有ないし創造へと化すのであろうか。衝動が創造的になるのは外的環境に一切委ねられているのか。Russellはこう語る。「衝動自身はある行動を指向している。<sup>60)</sup>」衝動はたんに盲目かつ無目的ではなく、何ものかへ向かっているとRussellは言いたいのであろう。たしかに、衝動は理性の光を受ける以前のもの、社会のネットワークの前にあるもの、非日常的なもの、という意味では盲目かつ無目的である。しかし、衝動は理性や社会の日常性を越えたところで、それ自身の方向を有しているのである。事実、衝動が人間活動のすべての源泉であるとすれば、創造へ向かう力も衝動に内在していると見る方が正しいであろう。

Russellによると、創造的衝動は、「中心の成長原理、木が光を求めるように衝動や願望をある方向へ導いて行く本性的衝迫(an instinctive urgency)から生じている。<sup>61)</sup>」この本性的衝迫なるものが衝動を創造へと突き動かすのであろう。もっとも、この本性的衝迫も広義の衝動であるにちがいない。そして、このような衝動も必然的に現実となるわけではない。「必要な協力がすべて自発的な衝動から生れるのを望むのは夢想的であろう。<sup>62)</sup>」自発的な衝動(spontaneous impulse)といえども何らかの外的刺激がなければ発現できないのである。「人間は樹木のようにその成長のために正しい土壌と抑圧からの十分な自由を必要とする。<sup>63)</sup>」「他者に有害である衝動は妨害された成長から生じ、本性的な発展において妨げられることのない人びとには最少となる傾向がある。<sup>64)</sup>」本性的衝迫すなわち自発的衝動が創造的になるためには妨害のないこと、自由が不可欠なのである。これが妨げられたとき、Russellは破壊的な衝動が生れるというのだ。

それでは正しい土壌ないし自由とは何か。Russellは語る。「しかし、人間の成長に求められる土壌と自由とは、樹木の成長に求められる土壌と自由よりも、発見し達成することがは

りしれないほど困難なのである。しかも望まれる十全な成長というものは定義することも論証することもできない。それは微妙で複雑であり、ただ繊細な直観によって感得し、想像力と敬意とによっておぼろげに把握することができるにすぎない。<sup>65)</sup>」人間の成長の意味及びそのために不可欠な正しい土壌と自由とは直観と想像力と人間に対する敬意とによって予見され発見されるのであり、そうでしかありえないのである。もちろん、予見し発見する主体は現実の人間そのものである。したがって、人間の成長すなわち衝動の創造的発展には直観と想像力と敬意にみちた人間の援助が不可欠であろう。

それにしても人間はどこへ向かって成長して行くのか。Russellによれば、それは「おぼろげ」ながらも把握することのできるものではあった。そうでなければ、われわれはただ衝動や本能を肯定するだけになろう。この点で、成長することのみを教育の基本におくプラグマティズムから、Russellは距離をとる。Russellは、プラグマティズムは「思索を本能に従属させること、思索がそれ自身の理想を達成することを拒否することに等しい。<sup>36)</sup>」

Russellは『教育論』のなかで次のように語ったことがある。「正しい教育は本能と調和しながら生きることを可能にする。この本能とは訓練され開発された本能である。<sup>67)</sup>」ここでいう本能とは衝動かそれに近いものであろう。したがって、開発された本能とは開発された衝動と称してよいであろう。Russellはここで衝動の教育を強力に語る。「私が意味している教育は訓育(instruction)を方法として一定の精神的諸習慣及び人生と世界に関する見方を形成すること、と定義されるであろう。<sup>68)</sup>」すると、「どういう種類の精神的諸習慣ならびに見方が訓育の結果として望まれうるかということが、次にのこる。<sup>69)</sup>」これが人間の成長の方向を示すものであるのだ。但し、これは「おぼろげ」にしか示されえないのであろうが。

それにしても、衝動や本能を教育する根源的力は何であろうか。これはRussellの次の発言

から推量されるであろう。「一時的な衝動は知恵という統合する衝動(the unifying impulse)によって統御される。<sup>70)</sup>」「統合する」とは、様々の働きを中心へ向けて結びつけ、現実生きることに促すことであろう。したがって、統合する衝動は強力な生きた衝動であるにちがいない。これは「中心の成長原理」つまり「本性的衝迫」と同一のものであろう。

RussellはSpinozaの定理を想起しながら次のように語る。「情熱だけが情熱を制御できるのであり、反対の衝動あるいは願望だけが衝動を制御できるのである。伝統的なモラリストたちが説いてきた理性は善い生活を築くためにはあまりにも消極的で生気を欠いている。<sup>71)</sup>」それゆえ、統合する衝動は自己および他者の拡散し分裂する衝動を制御して、調和し、中心に向けて結びつけ、活性化するのであろう。それをRussellは「知恵」と称した。知恵こそが、衝動の方向を発見し、その成長を促すことのできる生きた衝動であって、それは直観と想像力と人間に対する敬意とを包含したものであるのだ。したがって、統合する衝動すなわち知恵は、たんなる本能や理性あるいは衝動一般を越えている。それは精神としての衝動というべきか。Russellは語る。「人間の生活が善となるためには、……個人の成長原理から生れるものを越えて、非個人的かつ普遍的な何ものかを必要とする。それは精神の生活によって与えられるものである。<sup>72)</sup>」個人の生の衝動を越えた、普遍的な何ものかが衝動を統合する地平となるのだ。その地平は精神すなわち知恵としての衝動が他の諸衝動を集中させる中心点であろう。そして、Russellは決して明言はしなかったが、個別の視座からいえば、その中心点とは個人の内なる自己となるのではあるまいか。自己とは、したがって、精神であり、他の諸衝動を統合する衝動中心の成長原理、本性的衝迫、知恵であり、Russellは、これをして本来の人間と見ているはずである。

む す び

本来的な人間とは、普遍、自己・精神において統合している人間のことである。Russell にとって、普遍、精神、自己、衝動、知恵はひとつの系を成しており、これが人間を説明する原理となっている。とくに自己と衝動とは平行して論じられていると見てよい。自己の一元論と二元論に平行して衝動の一元論と二元論が論じられてきたのであるから。

しかし、それにしても、このような自己、精神、衝動であるところの人間は何によってそのような人間であることが可能であるのか。人間の中核である自己とは何であり、いずこより生まれ出たのであるか。Russell はこれには答えない。それは知りようもないことなのであろう。それは深い感得ないし自覚をよすがとすることかもしれない。Russell は、人を愛し、人に対して「崇敬の念」を抱く者に対してこう語る。「そのような人間は、生きるもののすべてに、とりわけ人間に、そのなかでも子どもに、神聖な名状しがたい、無限の何ものか、独自の、不思議にも高貴なあるもの、生命の成長原理、世界の黙々たる努力の具体化した断片といったものを感じるのである。」この世界とは、物理化学的な抽象的宇宙ではない。これはペルソナとしての何ものかと思われる。だが、もうこうしたことは「理性的な根拠からは容易には弁護できない<sup>74)</sup>」のだ。あえていえば、それは「知恵に近い何かである。<sup>75)</sup>」Russell にとって、人間とは、理性の追求を越えた、無限に神秘的な何ものかであるところの、侵すべからざる尊厳性を有する存在なのである。

注

- 1) My Mental Development, In: The Philosophy of Bertrand Russell, Ed, by Shilpp, p. A, Harper Torchbooks, New York, 1963, p. 20.
- 2) Russell, : Authority and the Individual, Unwin Books, London, 1967. p. 87.

- 3) Russell, : My Philosophical Development, George Allen & Unwin, London, 1959. p. 139.
- 4) Russell, : Portraits from Memory and Other Essays, George Allen & Unwin, London, 1956. p. 149.
- 5) Russell, : My Philosophical Development, op, cit., p. 139.
- 6) Russell, : Portraits from Memory and Other Essays, op. cit, p. 152.
- 7) Russell, ibid, p. 135.
- 8) Russell, : My Philosophical Development, op. cit, p. 139.
- 9) Russell, : Portraits from Memory and Other Essays, op. cit, p. 147.
- 10) Russell, ibid. p. 148.
- 11) Russell, ibid. p. 148.
- 12) Whitehead, A.N, : Science and Modern World, 1926. Cambridge, at the University Press, 1953. p. 99.
- 13) Wood, A. : Russell's Philosophy, In, : Russell, My Philosophical Development, op. cit, p. 269.
- 14) Russell, : Portraits from Memory and Other Essays, op. cit, p. 93.
- 15) Russell, : History of Western Philosophy, Allen & Unwin, 1962. p. 550.
- 16) Russell, : My Philosophical Development, op. cit, p. 135.
- 17) Russell, ibid, pp. 135—136.
- 18) Russell, ibid. p. 136.
- 19) Russell, : Portraits from Memory and Other Essays, op. cit, p. 137.
- 20) Russell, ibid. p. 137.
- 21) Russell, ibid, p. 137.
- 22) Russell, ibid. p. 137.
- 23) Russell, ibid. p. 138.
- 24) Russell, ibid, p. 138.
- 25) Russell, ibid. p. 138.
- 26) Russell, ibid. p. 138.
- 27) Russell, ibid. p. 138.

- 28) Russell, *ibid.* p. 139.
- 29) Russell, *ibid.* p. 139.
- 30) Russell, *ibid.* p. 153.
- 31) Russell, *ibid.* p. 153.
- 32) Russell, *My Philosophical Development*,  
*op. cit.* p. 139.
- 33) Russell, *ibid.* p. 139.
- 34) Russell, *ibid.* p. 140.
- 35) Russell, *ibid.* p. 142.
- 36) Russell, *ibid.* p. 143.
- 37) Russell, *ibid.* p. 142.
- 38) Russell, *ibid.* p. 143.
- 39) Russell, *ibid.* p. 143.
- 40) Russell, *ibid.* p. 143.
- 41) Russell, *ibid.* p. 143.
- 42) Russell, *ibid.* p. 143.
- 43) Russell, *ibid.* p. 143.
- 44) Russell, *ibid.* pp. 143—144.
- 45) Russell, *ibid.* p. 143.
- 46) Russell, : *Principles of Social  
Reconstruction*, Allen & Unwin.  
London, 1930. p. 12. cf: *Human  
Society in Ethics and Politics*, Allen  
& Unwin, 1954. p. 8.
- 47) Russell, : *Principles of Social  
Reconstruction*, *op. cit.* p. 13.
- 48) Russell, : *Human Society in Ethics  
and Politics*, *op. cit.* p. 16.
- 49) Russell, *ibid.* p. 176.
- 50) Russell, : *Principles of Social  
Reconstruction*, *op. cit.* p. 205.
- 51) Russell, *ibid.* p. 205.
- 52) Russell, *ibid.* p. 206.
- 53) Russell, *ibid.* p. 207.
- 54) Russell, *ibid.* p. 207.
- 55) Russell, *ibid.* p. 17.
- 56) Russell, *ibid.* p. 16.
- 57) Russell, *ibid.* p. 16.
- 58) Russell, *ibid.* pp. 17—18.
- 59) Russell, *ibid.* p. 17.
- 60) Russell, *ibid.* p. 16.
- 61) Russell, *ibid.* p. 24.
- 62) Russell, : *In Praise of Idleness and  
Other Essays*, Unwin Books, London,  
1967. p. 127.
- 63) Russell, : *Principles of Social  
Reconstruction*. *op. cit.* p. 25.
- 64) Russell, *ibid.* p. 25.
- 65) Russell, *ibid.* p. 25.
- 66) Russell, *ibid.* p. 214.
- 67) Russell, : *On Education, Especially in  
Early Childhood*, Unwin Books,  
London, 1973. p. 75.
- 68) Russell, : *Mysticism and Logic and  
Other Essays* Unwin Books, London,  
1974. p. 33.
- 69) Russell, *ibid.* p. 33.
- 70) Russell, *ibid.* p. 35.
- 71) Russell, : *Principles of Social  
Reconstruction*. *op. cit.* p. 12.
- 72) Russell, *ibid.* pp. 216—217.
- 73) Russell, *ibid.* p. 147.
- 74) Russell, *ibid.* p. 149.
- 75) Russell, *ibid.* p. 147.